

『神のことばに信頼する』(要旨)

聖書箇所：詩篇46篇10節

はじめに

一日没から夜明けまで—
現代の私たちの時間軸

1. やめよ。知れ。わたしこそ神

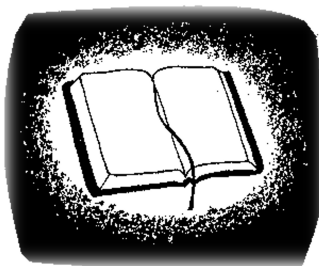
「やめよ」(*harpu*)と訳されたヘブル語は、行動や発言を停止する、中止する、という意味があります(参考: *ヘブル&アラム語辞書 HALOT*)。

例) 言い訳をするサウル王に:

「サムエルはサウルに言った。『やめなさい。昨夜、主が私に言われたことをあなたに知らせます。』(Iサムエル15:16)

いくつかの日本語訳を確認しますと、「やめよ」(新改訳2017、バルバロ訳)以外に「静まれ」(聖書協会共同訳、フランシスコ会聖書研究所訳)、意識では「よく聞きなさい」(リビング・バイブル)と訳されています。

私たちは、心の余裕がなくなる時に、常に何かを考え、歩き回り、話し続けることがあるでしょう。責任感の強い人であればなおさら、私が何とかしなくてはならないと考えます。神はそうした私たちに「やめよ。知れ。わたしこそ神」と語りかけるのです。



2. 神に信頼するということ

10節は「万軍の主」への信頼を詠う8~11節に組み込まれています。ところで、この8~11節のモデルになった出来事の一つとして考えられているのが、ヒゼキヤ王の時代にアッシリア王セナケリブ軍が壊滅した時のことです。

ヒゼキヤ王は勇猛なアッシリア軍に囲まれ、もはや絶体絶命という場面を迎えます。ところが翌朝、ヒゼキヤ王はアッシリア軍18万5千人が死体となって転がっているのを目の当たりにします(II列王18~19章)。夜の間主の使いが出て行き、アッシリアの陣営で18万5千人を打ち殺したからでした(疫病によって?)。ヒゼキヤ王は夜間のために何が起こったのかを見てはいませんでした。朝を迎え危機を脱したことを知りました。ヒゼキヤは、人間の力を超えた神様の介入に拠り頼んだ王の一人でした。

聖書の時代の人々は、基本的に夜間の活動を停止していました。現代人以上に「夜明け」と「日没」を意識した生活を送っていたのでしよう。特に夜間は私がどうにもできない時間帯でした。こうした夜に、救いの神に信頼して、身を横たえて眠る(詩3:5)ことができるとしたらどんなに幸いなことでしょう。

この詩の表題は「ダビデがその子アブサロムから逃れたときに」です。預言者ナタン¹の宣告が時至って実現したのです。(参照: IIサムエル12:7-12)。彼は完全な被害者だとは言いきれない心の痛みを抱えていたことでしょう。過去を振り返り苛まれることも少なからずあったと考えられます。

「私は身を横たえて眠り また目を覚ます。主が私を支えてくださるから。私は幾万の民をも恐れぬ。彼らが私を取り囲もうとも。」(詩3:5-6)

信仰者は、全ての問題が片付いたから「神に信頼する」のでなく、今抱えている課題と向き合いながらも、神に信頼するのです。

3. 神を神とする—礼拝者として—

「私が何とかするのだ」とあくせく動き回る者に「やめよ。知れ。わたしこそ神」と、立ち止まるようにと言われるのです。

▷礼拝(Worship)とは:「礼拝とは何なのでしょうか。一言で言えば、『神を神とする』こと…神は最高に価値のある方ですから、その神にふさわしい価値を帰していくということなのです。」(内田和彦著「『教会は初めて』という人のための本」いのちのことば社)。

激しい嵐、敵からの攻撃、後悔からくる心の痛み…それらを「私が何とかするのだ」という生き方から、「神を神とする」生き方に立とうとする時に、私たちは真の安心を受け取ることができるのです。週のはじめの日の朝、一旦、やめて、神のことばに耳を傾けようではありませんか。

「やめよ。知れ。わたしこそ神。わたしは国々の間であがめられ 地の上であがめられる。」(46:10)